

富士に祈る 66

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 ―岡野聖憲・その20―

先回は新設された東京道場において宗教教師養成のための「宗教教師教養学院」を開設し、聖憲が考案するところの「宗教の普遍的価値観」を説きつつ、「三聖地巡拝」や「真綿モール編」といった実践活動を行うところまでを記した。今回は、「真綿モール編」による産業指導の実践を行い、聖憲の遺徳を祝って北本宿に頌徳碑が建立されることまでを記す。

真綿モール編とは、生糸の制作にはむかない屑繭を広げた「真綿」を紐状にして、これを編んで様々な衣料を作る方法である。戦時下において統制品から外れている屑繭を使うことや、その技術も簡単に、短時間で修得

できること、そして、工夫次第では様々な衣料を作ることができることなどの利点があった。聖憲は、この技術を戦争未亡人の自立支援に役立てようと考えたのである。まず手始めに、長野県松本在住会員で、すでに真綿モール編の技術を修得している惣洞みち子を東京道場に招き、講習会を開くことにした。

真綿モール編の講習会では基本となる羽織下とチョッキの編み方から指導が始まった。講習を受ける女性たちは、慣れない作業に手の皮をむきながら一つ一つの技術を修得していった。技術の習得が充分に行われると、次に、作品の種類を増やしていくことを心がけた。

帽子やマフラー、ズボン下やケープなど、作ることで、次第に作業は本格化していったのである。昭和十七年（一九四二）には衣料品の欠乏がはなはだしくなり、二月にはこれらの購入は総合点数制による切符制となった。しかし、点数制で一年間に購入できるものは、例えば都市生活者で成年男子の場合は国民服上下とワイシャツ一枚、長袖シャツとズボン下各一枚、パンツ二枚、靴下一足という限られた点数でしかなかった、しかも、繊維工場は次々と軍需工場へと転換させられていたから、次第に、点数分の製品を購入することさえも不可能となり、切符制そのものが成り立たなくなっていくのであった。

こうした事態を予見していた聖憲は、長野県岩田村で繭の売買や生糸づくりを生業としていた広瀬武甫に糸系の増産を依頼し、それを名古屋でメ

リヤス工場を営んでいた浅井信一のところへ送らせ、靴下や半ズボン、腰巻などを製造するように指示した。この三者が真綿を使った繊維製品の制作について交わした書簡は膨大なものであった。特に、広瀬の下で生産している手紡糸が不揃いなために、浅井の工場では品化できないという問題に対して、聖憲は「仕立て」という言葉を用いて、その人格の修正・成長をはからせ、共に成長していく道の模索を二人に促している。

聖憲が産業指導として重点を置いていたのは繊維製品の増産だけではない。食料についても、各支部に向けて馬鈴薯（ジャガイモ）や甘藷（サツマイモ）を送り続けていたし、信州一帯に五十年に一度しか実らないと言われる熊笹の実がなったことを耳にするや、これを使って、代用食や飼料にした。

また、「産業指導」とは

いえ、集団にのみ対して行われたのではなく、会員個人に対する指導も同時に行われた。例えば、神戸の行吉哉女という会員は「教員になる」という夢を実現し、教師をしていったが、初めて東京道場を尋ねた時、聖憲は「教員を辞めろ」との指導をした。会長の言葉を謙虚に受け止めた行吉は仕事を辞め、一時は夫の仕事である貿易商を手伝っていたが、「何かしたい」という気持ち湧いてどうすることもできず、自身が洋裁の技術や指導を学び、学校を建ててこれを広く指導するということを発起して、「神戸新装女学院」を開設した。これもまた、真綿モール編同様、聖憲が力を注いだ戦争未亡人の自立を助ける道の一つになったのである。ちなみに、「神戸新装女学院」は現在の「神戸女子大学」の前身である。当該の大学の建学の精神は「世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする有

為な女性を育成する」とにあり、これこそが解脱の精神を受け継いだ建学の目的であることは言うまでもなからう。

さて、昭和十六年（一九四一）は聖憲の還暦祝いの年であった。十一月二十八日の聖憲の誕生日にあわせて、「会長還暦祝賀式」が行われることになり、同時に、日ごろ

「今日此の日を以て生誕第一の歩みを発した」とを述べ、さらに「予は自らを鞭して勇気を鼓舞し、是れより新世界に入らんとする」ことを述べ、芽吹き、花咲くことをめざして来た「生」から、大地に種を播き、会員諸氏を導き、従い歩み続けることができる人を育てることを説いたのである。

高尾山の昆虫

ミツノゴミムシダマシ

ツノを持った虫はカブトムシを始めとして、大アゴが発達したクワガタの仲間、反り返ったツノを持つダイコクコガネやエンマコガネ等のフン虫も知られています。ゴミムシダマシの中にもツノを有する種は少なからずいて、その造形の奇抜さにはなかなか興味深いものがあります。

ミツノゴミムシダマシは艶消しの光沢のない黒色で、オスには頭部に逆三角形のツノを備え、両目の横には先端に黄褐色の毛束に付くやや斜め後方、且つ上方に伸びる一對の鋸形状のツノと計三つのツノを有するのが特徴です。朽木やカワラタケ等で見かけることが多く、成虫も幼虫もキノコ類を好むように思えます。

三つのツノ状突起がどんな役割を果たすのか？メスを巡っての闘争用の武器としてはいかにも貧弱で考えにくく、キノコや朽木の洞を確保し他のオスの侵入を妨げるのに役に立っているのではと推測します。

高尾ではキノコの周辺以外に、灯火でもその姿を見かけることがあります。

また冬季に朽木を崩すと本種が出てくるのが時折あり、成虫越冬もするようです。一見地味ながら雌雄異型の味わいのある種だと感じます。

（撮影・文 松島 孝）



真綿モール編の上着

